

『伊勢物語』の言語遊戯―段と段とを繋ぐもの―

徳岡 涼

はじめに

『伊勢物語』は、章段毎にその表現や内容についての研究がなされることが多い。あるいは、互いに関係の深い章段があることから、二条后関係章段、東下り関係章段、伊勢斎宮関係章段、惟喬親王章関係章段と、この四つの章段毎に論じられることも多い。しかし、上記のまとまり以外の段についても段と段との繋がりについて、研究が重ねられてきた。

室伏信助氏は、終焉歌の周辺の段(115段から125段)について用いられる言葉、例えば、「第百十五段 1 陸奥 2 都島 第百十六段 1 陸奥 2 小島 3 久しく・はまびさし 4 みなよく 百十七段 3 久しく 4 住吉 百十八段 3 久しく 5 忘るる 6 はふ木あまた(以下略)」を挙げ、「和歌的な修辞とも考えられる用語で鎖状につながっている

こと」から、「言語遊戯的機能が存する」ことを指摘されたが、「残念ながら、内容的な尺度による限り、連接の関わりはまったく見いだすことができない」という。のち、定家本伊勢物語の表現として、再度論じられた折りに、それは、「業平一代記として読まれてきた伊勢物語の世界を閉じる方法」とされる一方で、「物語二百番歌合の編成に果たした編者藤原定家の作為性」についても言及された。

先掲の室伏論にならって、吉海直人氏も、初段から10段あるいは、39段から46段、56段から62段に掛ける言葉の上での連繋を「(ここでは割愛する)として示される。

吉海氏は、塚原鉄雄氏の冒頭章段や十七段周辺における論に対して、「章段相互の関係をあまりにも内容と結びつけて考えておられる」というが、塚原氏は、十七段周辺には「鎖型構成」が見いだされるとされ、それぞれの段のモチーフである桜や白菊などを一覽した上で、「勢語十六

段は、紀有常と友たちとの友情」「男と男の情愛」、「勢語十六段は、男と女との情愛」という具合に内容にまで入って「対照的対偶」と位置づけられる。のち、柳田忠則氏⁵が、十七段から二十段には「語句の上での関連」があるとされたが、これは塚原氏の指摘とほぼ同趣である。つまり、「十七段 桜―雪 十八段 菊―雪」「男、近うありけり」十九段「同じ所なれば」宮仕え 二十段 宮仕え（稿者注・柳田論から挙げた）。

本田恵美氏⁶は、伊勢斎宮関係章段の中の七十段から七十五段に掛けて多用される二語を指摘し、「見る」「逢ふ」という対立の構図を看取」出来るといふ。本田氏は、それとは別に「伊勢物語」中に「海人」やそれに関わる語「また」「海人」はどのように描かれているか」を精査され、「業平」が在原氏という排除されていく一氏族の一人として、敗北的な（海人）の側面を内包しており、物語の生成がそのような反骨精神に由来していたからであろう」といふ見方も示される。

研究史を辿ると、段と段とを繋ぐ言葉とは、意味を同じくする言葉か反対語、対照的な言葉であることがわかるが、それを内容とどこまで関わらせるかという点で、自ずと立場が異なってくるようである。本稿も先学の驥尾に付し、これまで、殆ど顧みられることのなかった段と段とを繋ぐ

表現について考察したい。業平の一代記として語られる系統の中では重要な天福本『伊勢物語』を取りあげるが、定家本の生成については言及しない。

一、六十段と六十二段とを繋ぐもの

稿者の意図するところが伝わりやすい六十段と六十二段の関わりを説くところからはじめたい。周知の段だが、全文を掲げる。

むかし、をとこありけり。宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどの家刀自、まめに思はむといふ人につきて、人の国へいにけり。このをとこ、宇佐の使にていきけるに、ある国の祇承の官人の妻にてなむあると聞きて、「女あるじにかはらけとらせよ。さらずは飲まじ」といひければ、かはらけとりて出したりけるに、さかなりける橘をとりて、

五月まつ花たちばなの香をかげばむかしの人の袖の香ぞする

といひけるにぞ、思ひ出でて、尼になりて、山に入りてぞありける。

(六十段)

むかし、年ごろおとづれざりける女、心かしこくやあらざりけん、はかなき人のことにつきて、人の国な

りける人につかはれて、もと見し人の前に出で来て、
物食はせなどしけり。夜さり、「このありつる人たまへ」
とあるじにいひければ、おこせたりけり。をとこ、「我
をば知らずや」とて、

いにしへのにほひはいづら桜花こけるからともな
りにけるかな

といふを、いと恥づかしとおもひて、いらへもせであ
たるを、「などいらへもせぬ」といへば、「涙のこぼる、
に、目も見えず、物もいはれず」といふ。

これやこの我にあふみをのがれつ、年月経れども
さり顔なき

といひて、衣脱ぎてとらせけれど、捨てて逃げにけり。
いづち去ぬらんとも知らず。

(六十二段)

両段のストーリーは近似している。

六十段の内容は、以下の通り。宮仕えに忙しい男は妻に
対して実意を尽くせない。妻は、誠実に思つてやろうとい
う男について、地方へ去つた。妻に去られた男は、宇佐の
勅使として使わされた。かつての妻がその国の接待役の小
役人の妻となつてゐるのを聞きつけて、その接待役に「女
主人に盃をささせなさい。そうしなければ酒は飲まない」
と言つたので、女は、盃を差し出した。男は、肴の橘の実
をとつて、「五月を待つて咲く花たちばなの香りをかぐと、

昔恋しかつた人の袖に薫きしめられていた香りがします」
と詠んだので、女は、かつての夫であると思ひ至り（恥じ
入つて）、尼になり、山に入ったのであつた。

なお、六十段は、『古今集』のよみ人しらず歌を利用し
て作られた一段であることは疑いない。

六十二段は、長いこと男から放置されていた女（かしく
くない女とされる）が、いいかげんな男の言葉に引かれ出
奔。他国に住んでいる人に召し使われていた。そこで、か
つての自分の夫の給仕などをさせられ、さらに、「夜にな
つたら、いまの給仕人を貸してください」と主人に言われ、
元の夫によこされる。男は「私のことを知らないのか」と
いつて詠み掛けた歌は、女をしごいた桜花に喩え手厳しい。
恥じ入り絶句する女に出奔を責める歌を畳みかけ、衣を下
賜するが、女は衣を捨てて逃げだし行方知れずとなつたと
いう。

この後半部分は、『今昔物語集』卷三十一「中務大輔娘成
三近江郡司婢」語第四にも載せる。野口元大氏に、「みや
び」という観点から、両段についての周到な読みが備わる
が、『伊勢物語』当該段と『今昔物語集』との相違について、
女に対して「満腔の同情を惜しもうとしない」のが、『今
昔物語集』と見られている。すなわち、「此レヲ思フニ糸
哀レナル事也。女、然ニコソト思ケルニ、身ノ宿世思ヒ被。

レ遣テ、恥カシサニ否不堪テ死ニケルニコソハ。男ノ、心ノ無カリケル也。其ノ事ヲ不顯サズシテ、只可養育カリケル事ヲ、トゾ思ユル」という結びの言葉によつても「明瞭」だと述べられている。しかし、先にも記したように、ほぼ似たストーリーの展開である。

取材される対象は、『古今和歌集』、『今昔物語集』に繋がる近江説話、と別々だったが六十段、六十二段と近い場所に配され、それぞれの存在を意識しているかの如く見える。なぜなのであろうか。

これは、男の読みかけた歌の素材が、六十段は「橘」、六十二段は「桜」とあることと関係があるように思う。つまり、右近の橘と左近の桜とを意識して語り直され、配置されたのであろう。広範に及ぶ言語遊戯での連繋というより、対偶する表現といえよう。

紫宸殿の前に植えられる橘と桜とは、元々、橘と梅とであった。『江談抄』をはじめ、『古事談』『禁秘抄』あるいは『帝王編年記』などにも同じような記事をのせる。

それらを総括すると、平安遷都の時(延暦十三年(七九四年))には、梅樹であったが、承和年間(八三四〜八四七)に枯失し、桜に植え替えられる時期は、仁明朝の時と言われる。

更に、貞観(八五七〜八八七)の頃に枯れかけたが、坂

上滝守が蘇生させたと『禁秘抄』はいう。天徳四年(九六〇)九月の内裏焼亡で消失。内裏新造の時、重明親王式部卿家の桜の木を移し植えるのである。重明親王の母は、源昇(源融父)の娘であるから、いわゆる、河原院文化圏に連なる意図を持った『伊勢物語』の配置であると想定したくなるどころだが、今は措く。

二、在原氏不遇章段から―七十九段、八十段、百一段―

在原氏は、業平の時代には、不遇ではなかったことは目崎徳衛氏⁽¹⁾の研究によって明らかにされ、周知の認識である。一方で『伊勢物語』に反権力、あるいは天皇周辺侵犯の意識が見え隠れするのもまた事実である。中に以下のような段がある。

むかし、氏のなかに親王うまれ給へりけり。御産屋に、人々歌よみけり。大祖父がたなりける翁のよめる。わが門に千尋ある影をうゑつれば夏冬たれか隠れざるべき

これは貞和の親王、時の人、中将の子となんいひける、兄の中納言行平のむすめの腹なり。(七十九段)

在原業平兄行平女、清和天皇更衣文子に、貞和親王が生まれる一慶事を業平が言祝いだ。「千尋ある影」は、本文

が「竹」と「影」とで分かれる。定家本の多くは「千尋ある影」とするが、以下の契沖『勢語憶断』所引『山海経』から「竹」ともいわれる。

ちひろあるかげとは、仙家の竹の陰なり。『山海経』

ニ云ク、在ニ崑崙ノ之北一有ニ岳ノ山ト云モノ。尋一竹生ヲ焉ニ。

注ニ、尋一竹ハ大竹ノ名。長サ千尋。『博物志』異草木部

ニ云ク、止些山ニ多シ竹。長サ千一仞。鳳凰食ニ其実ヲ。

山本登朗氏が、本文は天福本そのままに「千尋あるかげ」で良いと説かれた。それは、次の『白氏文集』「池上作」の以下の用例に拠るといふ。

西溪風生竹森森 西溪風生じて竹森森。

南潭萍開水沈沈 南潭萍開きて水沈沈。

(中略)

澄瀾方丈若万頃 澄瀾方丈万頃の若し。

倒影咫尺如千尋 倒影咫尺千尋の如し。

(後略)

一方、『伊勢物語全読解』（和泉書院）は、藤井高尚の『伊勢物語新釈』が「『かげ』とある本は、『たけ』をうつしあやまれるものなるべし。『蔭をうへる』とはつゝかぬ詞也」と言っていることを掲げ、「真名本だけではなく、広本系の本文に共通していることを思えば、なおさら重く感じられるのである」と説き「竹」説を支持される。

いづれにせよ、実態が「竹」であることは動かない。これは『日本書紀』神代下にある記事から、日本人の記憶において「竹」が連想されるものであったのかもしれない。木花開耶姫が、火明命、火酢芹命、彦火火出見尊（火折尊とも）を産んだ折り、臍の緒を切るのに用いられたのは竹刀であった。

一書に曰く、初め火焰明る時に兒火明命を生む。次に火炎盛なる時に兒火進命を生む。又は火酢芹命と曰す。次に火炎避る時に兒火折彦火火出見尊を生む。凡て此の三子、火も害ふこと能はず。及母も少しも損ふ所無し。時に竹刀を以ちて、其の兒の臍を截る。其の棄てし竹刀、終に竹林に成る。故、彼の地を号けて竹屋と曰ふ。(略)

『日本書紀』卷第二 神代下「第九段」(第三) 新編日本古典文学全集

棄てた竹刀は、竹林になり、竹屋と名付けられた。古代、新生児にまつわる植物は、竹だったのである。

七十九段の次は、以下の段である。

昔、おとろへたる家に、藤の花植ゑたる人ありけり。三月のつごもりに、その日雨そほふるに、人のもとへをりて奉らすとてよめる。

濡れつ、ぞしひてをりつる年の内に春はいくかも

あらじと思へば

(八十段)

この短い段は、『古今集』にも、

弥生の晦日の日、雨の降りけるに、藤の花を折
りて人に遣はしける
業平朝臣

ぬれつゝぞ強ひてをりつる年の内に春は幾日もあらじ

と思へば (春歌下・一三三)

とあり三月尺の歌として春歌下の末尾から二番目に置かれる。『伊勢物語』については、由良琢郎⁽⁴⁾氏の諸説整理もあるが、異なる二見解を挙げておきたい。

表面は献上の花に添えた歌だが、送り主が「衰へたる家」の者であること、贈られる花が「藤」であること、相手が「奉らす」という重い敬語で敬われねばならない身分の人であること、などを考え合わせると、衰運在原氏の業平が権門の藤原氏に、官位の昇進を乞うたという状況が浮んでくる。(『新潮日本古典集成』)

しかし、仁平道明⁽⁵⁾氏が、この読みに疑問を呈された。

前掲したようにこの第八十段の前に置かれた第七十九段は、在原氏を思わせる「氏」につながる親王(みこ)が生まれた話であり、第八十段の後に続くのは、源融をさすことになる「左のおほいまうちぎみ」との第八十一段、「惟喬の親王」や「紀有常」が登場する第八十二段・第八十三段、業平の母伊都内親王をさし

ている「母」である「宮」とのことを語る第八十四段である。このように、藤原氏によって圧迫されていく人々が登場し、その人々とのことを語る章段群の中で、藤原氏への愁訴、追従が語られていると読むのはむしろかしいのではないか。

とされ、七十九段の「よろこびと希望の後に、そのような章段が置かれることで、なおいつそう一旦は希望をもった「氏」「家」の暗い思いと嘆きが強調されることになるのである」と見ておられる。氏の論は、「おとろへたる家」という設定が『伊勢物語』において加えられたものであり、それは必ずしも、在原「氏」、業平「家」の実態を反映したものでなかった」とされる所に主眼がある。確かに、蔓性の手折りにくい藤ではあるが、「強ひてをりつる」と詠んでいるところからも、愁訴・追従とは考えにくい。

ところで、『伊勢物語』において今一度、藤が出てくるのは、百一段である。

むかし、左兵衛督なりける在原の行平といふありけり。その人の家によき酒ありと聞きて、うへにありける左中弁藤原の良近といふをなむ、まらうどござねにて、その日はあるじまうけしたりける。なさけある人にて、瓶に花をさせり。その花のなかに、あやしき藤の花ありけり。花のしなひ、三尺六寸ばかりなむありける。

それを題にてよむ。よみはてがたに、あるじのはらからなる、あるじしたまふと聞きて来たりければ、とらへてよませける。もとより歌のことは知らざりければ、すまひけれど、しひてよませければ、かくなん。

咲く花のしたに隠る、人多みありしにまさる藤のかげかも

「なごかくしもよむ」といひければ、「おほきおとゞの栄花の盛りにみまそがりて、藤氏のことに栄ゆるを思ひてよめる」となんいひける。みな人、そしらずなりにけり。

(百一段)

先ずは『新日本古典文学大系』（以下、『新大系』と略す）脚注の解説を挙げる。

この段はおのずから多層的な読みを要求するようである。いったい行平が藤原氏の弁官であるが傍流の良近を正客として招き、藤原氏の栄花の象徴ともいふべき稀有のみごとな花房の藤を題にして客人一同に歌をよませたというのも、何か魂胆がありはせぬか。また弟の業平が歌会の終りごろに姿を見せ、参会者の仲間入りするのがいかにも不相应であるかのように固辞しながら、人々がこれは何としたことかと色をなすような歌をよみ、咎められては平然と太政大臣良房の栄華をたたえたのだと言ひ抜けている。業平の真意、また演

出者であることは否定しえないだろう行平の意図は那辺にあるのか。この一七七番歌は、単に藤原氏の栄花を讃えるのではあるまい。その栄華のはえはえしさか、弱小の他氏の家運の下落とさしかえであることへの諷刺という一面のあることは否定しえなからう。「もとより歌のことは知らざりければ」とあることも意味深長であろう。常道から逸脱する特権を与えられるからである。

『角川ソフィア文庫』、補注は、以下のように説く。

「ありし」を「在氏」にかけて、藤原氏に媚びを売り在原氏を自嘲したとする説、専横を極める藤原氏に対する諷刺とする説などがあるが、主客である藤原良近への単なる挨拶の歌と見るべきであろう。後の文に、「など、かくしもよむ」とあるのは、単に一座の人々が歌の真意をつかみかねた事情を物語っているにすぎぬであろう。

『闕疑抄』は、「藤家の忠仁公の栄花一門にをよぶとよめり。春日さす藤の下かげ色みえてありしにまさるやどの池水」として、『新勅撰和歌集』（賀・四八六）の知家歌を掲げる。鎌倉期には、この歌に関して藤原氏の栄花を詠んでおり、幽斎もその線で理解していた。

「ありし」に「在氏」を掛ける用例は、業平と同時代に

は見出されないが、不審に思った人々、在氏と理解したのではないか。

七十九段において在原氏の希望である貞和親王が「千尋あるかげ（竹）」と象徴されていたことと対比させた藤原氏を象徴する藤であり、「藤のかげ」とは、内実は多義的であつても藤原氏の繁栄を示している。

この二つの植物も、内裏に植えられる植物であつた。清涼殿の東側には、白砂に呉竹と河竹が植えられている。藤はもちろん清涼殿に近接する藤壺を象徴する植物である。第一節で述べたように、六〇段と六十二段とが、左近の桜、右近の橘を意識した章段だと認められるのであるならば、清涼殿と藤壺の植物であり、それらを意識したものかもしれない。

三、伊勢齋宮関連章段のなかで

通常、伊勢齋宮関係章段としてのまとまりで論じられることが多い六十五段から七十五段の中から、特に七十二段以降を取りあげてみたい。しかし、妹尾好信氏⁽¹⁶⁾によつて説かれたように七十三段から七十五段は、「伊勢齋宮に関する話とするのは疑問と言わざるを得ない」という見方もある。確かに、以下の三段は、「伊勢」が舞台だとは描かれ

ない。

むかし、そこにありと聞けど、消息をだにいふべくもあらぬ女のあたりを思ひける。

目には見て手にはとられぬ月のうちの桂のごとき
君にぞありける
(七十三段)

むかし、をとこ、女をいたう恨みて、

岩根ふみ重なる山にあらねども逢はぬ日おほく恋
ひわたるかな
(七十四段)

昔、をとこ、「伊勢の国に率て行きてあらむ」とい

ひければ、女、

大淀の浜に生ふてふみるからに心はなぎぬ語らは
ねども

といひて、ましてつれなかりければ、をとこ、

袖ぬれて海人の刈りほすわたつうみのみるをあふ
にてやまむとやする

女、

岩間より生ふるみるめしつれなくは潮干潮満ちか

ひもありなん

又、をとこ

涙にぞぬれつ、しほる世の人のつらき心は袖のし
づくか

世に逢ふことかたき女になん。

(七十五段)

七十三段に關しては、手の届かない女性を桂に喩えることから、例えば『新大系』脚注が、類歌である『万葉集』湯原王歌「目には見て手には取らぬ月の内の桂のごとき妹をいかにせむ」(六三三)を掲げ、「思いはつのるもの奇りつくこともならぬ、それは二条の后や齋宮のような女人であるう」と説くように、二条の後か、伊勢齋宮に擬す見方がある。この七十三段は、伊勢齋宮關係章段である七十二段、

むかし、をとこ、伊勢の国なりける女、又え逢はで、
隣の国へ行くとて、いみじう恨みければ、女、

大淀の松はつらくもあらずにうらみてのみもか
へるなみかな

に続くものである。七十三段は、伊勢齋宮關係章段なのか否か。七十三段以降も、本田恵美氏の指摘にある「見る」『逢ふ』が多用される事からは、連繫しているようにも思える、一方で、先の妹尾氏の指摘も十分説得的である。七十二段と、七十三段との關係を再考したい。

七十二段は、『新大系』脚注が説くように「伊勢齋宮に仕えていた女房であることをにおわせて」、女自身は自分を「松」になぞらえている。一方、七十三段は、手の届かない女性を桂に喩えていた。これから浮かぶのは、「松桂」という詩語である。

例えば『白氏文集』凶宅詩に見られるように、ともに漢詩文に散見するものである。

泉鳴松桂枝 泉は鳴く松桂の枝

狐藏蘭菊叢 狐は藏る蘭菊の叢

(『白氏文集』卷一・「凶宅詩」)

日本漢詩にも、『懷風藻』の中の河島皇子の「五言山齋

一絶」の中に、

塵外年光満 塵外年光満ち

林間物候明 林間物候明らかなり

風月澄遊席 風月遊席に澄み

松桂期交情 松桂交情を期す (『懷風藻 全注釈』)

「松桂」が見出される。この五絶では、松も桂も常緑樹であり、変わらぬ交情の象徴である。このように、『白氏文集』が、日本文学に受容される以前から用いられている詩語であったことが分かるが、この詩語によって、伊勢齋宮關係章段である七十二段と、そうとは言い切れない見解もある七十三段とが連結させられたのであろう。『伊勢物語』中、「桂」が詠まれるのはここだけであるから、何らかの意図を持つてこの場所に配されと考えられるのである。

例えば、杉山英昭氏が、惟喬親王關係章段(第八十二段、第八十三段、第八十五段)に關して、「雪月花」が意識されていると説かれていた事が思い起こされる。同様に、詩

語を用いた繋がりが、他の箇所に見出されても良い。

蛇足ながら、七十四段の「岩根ふみ」の段は、何と繋がるのか考えておきたい。七十五段の三首目の歌は、

岩間より生ふるみるめしつれなくは潮干潮満ちかひも
ありなん

と、「岩間」の「岩」が描かれる。「岩根」「岩間」という言葉の連繋かも知れない。このあたり、七十段「大淀のわたり」、七十二段「大淀の松」、七十五段「大淀の浜」と、「大淀」という歌枕が頻出し、明らかに伊勢斎宮関連連章段であると認定される段と、そうではないと見なすことも可能な章段とを、「大淀」という言葉によっても連繋させている。

四、弥生の紅葉と秋の紅葉と

一節から三節にかけて、内裏にまつわる植物や、詩語による植物が配されている段を考察した。本節は、平安文学には稀有な、弥生の楓の紅葉が詠まれる二十段、初秋の初紅葉―秋の景物としてはよく用いられる―を詠む九十六段をとりあげたい。

二十段は、以下のような段である。

むかし、をとこ、大和にある女を見て、よばひてあ
ひにけり。さて、ほど経て、宮仕へする人なりければ、

帰りくる道に、三月ばかりに、かへでののみぢのいと
おもしろきを折りて、女のもとに道よりいひやる。

君がためたをれる枝は春ながらかくこそ秋のもみ
ぢしにけれ

とてやりたりければ、返事は京に來着きてなん持てき
たりける。

いつの間にうつろふ色のつきぬらん君が里には春
なかららし (二十段)

例えば『枕草子』に、

花の木ならぬは、かつら、五葉。

たそばの木、しな、き心ちすれど、花の木どもちり
はてて、おしなべてみどりになりたる中に、時もわ
かずこき紅葉のつやめきて、思ひもかけぬ青葉の中よ
りさしいでたる、珍し。(以下略)

(三十七段・新日本古典文学大系)

とある。『新大系』脚注は、「たそば」は、「たちそば」の略で、かなめもち」とし、更に、「かなめもち」は新芽が赤い。それを「時もわかず」と言ったのであろう。新緑一色の中の紅葉の美しさが、文末をしめくくる「珍し」とする。二十段のムクロジ科と思われる「かへでののみぢ」は、バラ科の「たそばの木」ではないが、春紅葉する楓の品種は多様にある。その春の楓の紅葉の対になるのが、次の

九十六段ではないだろうか。

むかし、をとこ有りけり。女をとかくいふこと月日
経にけり。石木にしあらねば、心苦しとや思ひけん、
やうくあはれと思ひけり。そのころ、六月の望ばかり
なりければ、女、身に瘡一つ二つ出できにけり。女
いひおこせたる、「今はなにの心もなし。身に瘡も一
つ二つ出でたり。時もいと暑し。すこし秋風吹き立ち
なん時、かならず逢はむ」といへりけり。秋まつころ
ほひに、こ、かしこより、その人のもとへいなむずな
りとして、口舌出できにけり。さりければ、女の兄人
にはかに迎へに来たり。さればこの女、かへの初紅
葉を拾はせて、歌をよみて、書きつけておこせたり。
秋かけていひしながらもあらなくに木の葉降りし
くえにこそありけれ
と書きおきて、「かしこより人おこせば、これをやれ」
とて去ぬ。

さて、やがて、後つひに今日まで知らず。よくてや
あらむ、あしくてやあらん、去にし所も知らず。かの
をとこは、天の逆手をうちてなむ呪ひをるなる、むく
つけきこと。人の呪ひごとは、負ふ物にやあらむ、負
はぬ物にやあらん、「いまこそは見め」とぞいふなる。
先ずは二十段について。『新潮日本古典集成』は、「男が

幸せそうな歌を贈り、女ははぐらかしてすねて見せる。そ
の呼吸を、「秋」の用語をすかさずとらえた手際とともに、
読みとるべきである。都の外に住む女が、男と対等以上に
わたり合つた珍しい段で、返歌が「京に来つきて」とどい
た点にも意味がある。返歌は早いのをよしとした時代だが、
「君が里には」というためには、男が京に帰り着く自分に
タイミングを合わせなければならない。女はそこまで計算
しているのだ」と見る。

右のように読み解かない『伊勢物語全読解』は、それ
ぞれの贈答歌を「あなたのためにと思つて折つた枝は、春
であるのに、このように秋と同様に紅葉していることです
よ。私の血の涙がかかつて」、「いつの間にこの紅葉のよう
に色変わりする気配がついたのでしよう。あなたの里には、
春がなくて秋―飽き―ばかりらしいですね」とする。更に、
『古今集』からの用例を示し、「紅葉の紅は、血の涙に染ま
つた袖の色を連想させるものではないか」とされ、「これ
ほどまでに思っているのだ、これほどまで別れがづらいの
だと言つてきた男に、「それほど思つてくださるあなたな
のに、一体いつの間に「うつろふ色」がついたのでしよう。
あなたの里（京）には、秋（飽き）ばかりで、春がないの
でしようね、きつと」と切り返したのである。「珍しい紅
葉をお送りします」では皮肉をもつてそれに応じた女の返

歌も、中途半端な、つまらないものになってしまうのである」とする。

かつて、秋山虔氏⁽⁸⁾も論じられ、『新大系』では、女の返歌を「さわやかな切り返し」と見ておられるから、皮肉とは解されていない。どのように読み解くべきか。むかし男は、「宮仕へする人」で、その為に帰洛しなければならなかった。この「宮仕へ」に関して、『伊勢物語』にいうところの「まめ男」と関わらせた今西祐一郎氏⁽⁹⁾の論がある。氏は、「宮仕へ」の用例を博搜し、「まめ男」の資質を、

「まめ男」とは、文字通りまじめな男、恋においても宮仕えとは無縁でいらぬ男の謂ではなかったか。

と説かれる。これは、二十段を理解する時にも有用である。「宮仕へ」に一心のまめ男の姿を見て取らなければならないだろう。従つてこの男の心が「うつろふ」ことはあり得ない。二十段は相思相愛の男女の贈答歌だったのである。

秋風が吹くころの時分を描く九十六段は、長い年月思いを寄せながらも、女の約束不履行で結ばれなかつた物語であり、男は女を呪い続ける、というものであった。

二十段では男から、晩春に紅葉する楓に添えられた歌が、九十六段では、女が初秋の楓の初紅葉に書き付けた歌が、それぞれに贈られている。この両段は、段の順序としては離れていながらも対照的に語られ、配されているといえよ

う。

むすびにかえて

これまで植物に関する言葉で繋がる段と段とを見てきた。言語遊戯という側面もあるが、内容的な繋がりがも看取出来た。『伊勢物語』の段と段とを繋ぐ表現を考察するときには、言語遊戯という側面を広範囲に及ぼすか、内容まで含めて考えるか、二つの立場に分かれる。両方からの考察を試みた上で、『伊勢物語』の目指した表現とは何かということについて、あるいは生成の一端についても解明出来ればと思う。

最後に、「玉かづら」という植物が詠まれる三十六段と百十八段とを取りあげて、これらの考察の一旦のとじ目としたい。

昔、「忘れぬるなめり」と問ひ言しける女のもとに、

谷せばみ峰まで延へる玉かづら絶えむと人にわが

思はなくに (二十六段)

昔、をとこ、久しくおともせで、「忘る、心もなし。

まゐり来む」といへりければ、

玉かづらはふ木あまたになりぬれば絶えぬ心のう

れしげもなし

(百十八段)

この両段は、離れたところに配置されながらも、三十六段が、長く延びる玉かづらをもつて、変わらぬ愛を誓っている男の歌であるのに対し、百十八段は、あちこちの木にはいまつわる玉かづらをもつて、男の不実を歎く女の歌で、対照的である。

蔓の特性をとらえた、別個に詠まれた歌(前者『万葉集』後者『古今集』である)から派生させた物語である。

先行研究多く、ここでそれらを取りあげることほしないが『伊勢物語』の初段と四十一段とが、紫草にまつわる物語であったのと同様に、同じ植物を用いて対照的に語られる両段にも、言語遊戯の意識が働いている。

注記

- (1) 室伏信助「伊勢物語終焉歌の周辺」『跡見学園女子大学国文学科報』第二二号(一九八四年三月)
- (2) 室伏信助「定家本伊勢物語の表現形式―住吉行幸の章段をめぐって―」『伊勢物語―諸相と新見―』(一九九五年 風間書房)
- (3) 吉海直人「和歌と物語―歌物語を通して―」『国文学解釈と鑑賞』第51巻6号(一九八六年六月)
- (4) 塚原鉄雄「勢語章段の鎖型構成―伊勢物語の第十七段―」『中古文学』第25号(一九八〇年四月)、氏には、冒頭章段をめぐ

ぐる「章段構成の対照関係―伊勢物語の発端章段―」『富倉徳次郎博士古稀記念論文集 古典の諸相』富倉徳次郎先生の古稀を祝う会編(一九六九年 駒澤大学国文学研究室)もある。

- (5) 柳田忠利「昔男」の生成―『古今集』業平歌を介して―『國文學』第43巻2号(一九九八年二月)

- (6) 本田恵美「響振する詞章―『伊勢物語』七三段、七四段を中心に―」『国語国文 研究と教育』第40号(二〇〇二年二月)

- (7) 本田恵美「業平」と「海人」―敗者文学としての『伊勢物語』―『伊勢物語成立と享受 伊勢物語創造と変容』(二〇〇九年五月 竹林舎)

- (8) 野口元大「古代物語の構造」『みやびと愛』(一九六九年 有精堂)

- (9) 紫宸殿の前の梅花を折り、頭に挿す記事(『続日本後紀』承和十二年(八四五)二月一日及び二十三日)を、山田孝雄「櫻史」一九四二年 櫻書房 が指摘している。

- (10) 渡辺実「源融と伊勢物語」『国語と國文學』49巻11号(一九七二年十一月)

- (11) 目崎徳衛『平安文学史論』(一九六八年 桜楓社)

- (12) 後藤祥子「伊勢物語の成立の意義」山本登朗編『伊勢物語虚構の成立』(伊勢物語 成立と享受①)(二〇〇八年 竹林舎)

- (13) 山本登朗「千尋あるかげ」―伊勢物語七十九段をめぐって―『礎』180号(二〇〇一年十月)

- (14) 由良琢郎「伊勢物語講説」下巻(一九八六年 明治書院)

- (15) 仁平道明「古今和歌集」から『伊勢物語』へ―感動の虚構、

虚構の歴史―(12)と同。

(16) 妹尾好信『伊勢物語』の斎宮像―後藤祥子編『平安文学と隣接諸学6 王朝文学と斎宮・齋院』(二〇〇九年五月)

竹林舎)

(17) 杉山英昭「惟喬親王章段」『一冊の講座伊勢物語』(一九八三年 有精堂)。なお、『伊勢物語』については触れないが、宮地敦子「雪月花」の受容『國語と國文学』第51巻8号(一九七四年八月)も同時代の受容の過程について述べられている。

(18) 秋山虔「研究的随想(一) 読むことのむずかしさ、おもしろさ―『伊勢物語』二十段をめぐって―」『磔』120号(一九九六年十月)

(19) 今西祐一郎「まめ男」の背景―『伊勢物語』試論― 福井貞助編『伊勢物語―諸相と新見―』(一九九五年 風間書房)

(20) 宮谷聡美『伊勢物語』二二段「おのが世々」・九六段「天の逆手」―歌物語長編化の方法―『論叢伊勢物語I 本文と表現』王朝物語研究会編(一九九九年九月 新典社)。氏は、九六段を読み解くために、二十段を掲出されている。

付記

『伊勢物語』『古今和歌集』は、新日本古典文学大系(岩波書店)、『白氏文集』は、『白楽天詩選』(岩波文庫)から引用した。『今昔物語集』及び『江談抄』『古事談』は、新日本古典文学大系、『禁秘抄』(群書類従第二十六輯雑部)、『帝王編年記』(吉川弘文館)を参照した。